ここから これから
からから便り
NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
2025 年 11 月号 ［季刊発行］
Vol. 3

もくじ

●イベントのご報告
●それぞれの「ここから」物語
●寄稿「１ページのたより」
●各相談窓口
●北海道における被災避難者の受入状況
●編集後記

イベントのご報告

今年も「やっぱり秋は芋煮会」を開催しました！

10月4日㈯、今年も札幌にて芋煮会を開催しました。夏が暑かった今年の札幌は8月が過ぎても気温が高く、この日も天候に恵まれ最高気温は24・7度。半袖姿が多い芋煮会となりました。

今年も宍戸隆子さん（福島県伊達市）に芋煮作りをおまかせし、お手伝いのみなさんといっしょに、美味しい芋煮とさつまいもご飯を炊いていただきました。

11時半がすぎたころ、会場に集まった十数人で「いただきます～」とゆるりと食べはじめ、しばらくするとひとり、またひとりと集まってきてくれて、だんだん賑やかに。

「いやぁ～お久しぶりです！」と数年ぶりの再会に、つい、声が大きくなったり、「子どもたち全員に（背丈を）追い越されました」という話に、年月の経過を感じたり、「ちょうど札幌で用事もあったので」と、遠方から参加してくれた方もいたり。

今年も参加してくれた、不登校を考える親の会　ポレポレさん、葬送を考える市民の会さん、弁護士さんもいっしょにあれこれ話をしたり相談にのってもらったり。

ふと時計を見ると、終わりの時間が近づいていました。「次回、芋煮会を開催するときは、もう少し秋が深まる時期にしようね…」そんな会話を最後にしつつ、やっぱり今年も美味しい時間になりました。

今年作っていただいたさつまいもご飯を食べながら、懐かしいことを思い出しました。

２０１３年のことだったと思います。札幌で、避難された方々を招待しての「芋掘り交流会」が開催され、大人から子どもまで定員を超えた参加がありました。

後日、この時はじめてジャガイモ掘りを体験した、という方にお会いした時のこと。

「ジャガイモ掘りって、掘るというより『ジャガイモ拾い』ですね」

「ジャガイモ拾い？」

「向こう（避難元）では、子どもの頃から芋掘りといえばさつまいも。さつまいもは、ツルをひっぱって、掘って抜くけど、ジャガイモはごろごろと土から出てきた芋を拾う感じでした」

確かにこの時、芋を傷つけないように、最初に主催者が大きなスコップで畝（うね）を掘り返し、そのあと参加者が土から出てきた芋を手で集めていました。その方の話を聞いて、土の中から大きな芋がでてくるのか、たくさん連なって出てくるのか、自分で掘って抜くまでわからないさつまいも掘りには、また格別の楽しさがあったよなぁ、と、私は関東で過ごした幼少期に「芋掘り遠足」へ行った時のことを思い出していました。

さて、むかしより暖かくなった札幌で、来年はさつまいもを育ててみようかな。

（金榮）

それぞれのここから物語 《道庁職員編》

今年の「それぞれのここから物語」では、北海道庁でさまざまな支援の組み立てや支援策の大きな転換を経験した当時の担当職員にインタビューし、これまで北海道が行ってきた支援を振り返ります。

平成23（2011）年度 道外被災地支援グループ 所属（現・北海道総合政策部計画局 科学技術振興課科学技術振興係 専門主任）

三浦 学 氏

北海道の支援事業で最初に情報紙を発行したのは平成25年度でした。発送をはじめて今年で13年目になります。こうした事業が今あるのも、初動―つまり、発災直後の支援体制があってのこと。

前回お伝えした「道外被災県緊急支援対策本部」が短期間で緊急的な支援や体制の構築に取り組み、4月1日には避難者の受け入れや支援策の企画を担う「道外被災地支援グループ」が立ち上がりました。三浦さんは支援グループの初期メンバーです。

地震が起きた時は釧路教育局で仕事をしていました。庁舎が釧路港近くの高台にあったので港の方を見てみると、車がどんどん高台に向かって避難していて、普段の地震とは違う感じがしました。それまで津波警報は聞いたことがありましたが、大津波警報というのは初めてで、北海道南西沖地震の奥尻島の被害が頭をよぎりました。

三浦さんは初任地の釧路で8年間勤務し、2011年4月から本庁へ異動の内示が出ていました。部署も決まっていたのですが、異動の2日前に「道外被災地支援グループ」に内示が変わり、主に道内避難者への支援業務を担当することになりました。

まさか自分が、と思いました。初めての本庁勤務で、立ち上がったばかりの被災地支援の部署に配属されるとは思ってもいませんでした。異動初日、対策本部のある部屋に入ると、次々と電話が鳴り、職員が対応に追われ、業務について質問しようにも声のかけようもなく、仕事の分担は与えられましたが、正直、そのとき何をやったかは思い出せません。4月中は道内に避難された方々からの避難生活での困りごとに関する電話も多かったのですが、道ができることの限界もあって…。それでも、話を聞くだけでも安心されているようで、「電話してよかった…」という声を聞いて、被災・避難された方々はそれほど大変な思いをされてきているのだと、改めて感じていました。

対策本部立ち上げ時のメンバーは、5月中にそれぞれの部署へ戻っていき、最終的には三浦さんを含めて3名が「道外被災地支援グループ」としてさまざまな支援業務を行うことになりました。

3月31日から運用が開始された被災避難者サポート登録制度「ふるさとネット」のデータ整理、子どもたちの一時避難支援（移動費補助）に関する連絡調整など、夏頃まで多忙を極め、夜中の2時3時まで仕事が終わらないことも。

当時、避難して来る方がどんどん増えていったのは、北海道の支援が手厚い、という話が広がったからだと聞いています。当時の支援は行政のできる範囲を超えていたんじゃないかと思うほどで、できることはなんでもやろう、と対策本部立ち上げ時の職員が支援策を組み立て、私はその支援策を実行する。今思えば、何か理想を掲げてできる仕事ではなく、目の前にあることをやるしかない、そう思ってやり続けられる人が必要とされていて、それが自分の役割だったと思っています。

避難者の受け入れは夏をピークに徐々に減少しているとはいえ、約3,000名の避難者が道内で生活を続けていること、そして、子どもたちの一時避難支援のニーズが高いことを踏まえ、支援グループでは翌年度に向け委託による支援事業を組み立てることになりました。

事業を組み立てるにあたり正解というものがなく、できることも限られる中で、被災・避難された方々のために何をすればよいのか、かなり悩みました。避難された方々は納得されていただろうか、振り返ればもっとできることもあったのでは、とも思います。でも、このとき携わった支援策や運用開始から関わっていたふるさとネットをもとに、今もこうして事業が続いていること、そして、避難された方々にとって北海道が第二の居場所になってもらえたのであれば本当によかった、と思えます。

三浦さんに、支援グループでの経験から災害支援で大事なことはなにか？とたずねました。

初動が大事だと思います。それから、できることはなんでもやる。そのためには、支援する側が、被災された方々が困っていることをすぐに支援できる体制を整えられる組織であることが、大事なんだと思います。

平成24年度に北海道が実施した支援事業

【東日本大震災・避難者受入支援事業】

①一時避難者の受入支援
子どもたちの一時的な避難を実施する団体からの相談と移動交通費の補助（フェリー、バスなど）

②道内避難者への実態調査と道内市町村、支援団体へのアンケート

【東日本大震災・母子避難者への家族再会支援事業】

避難元から会いに来る家族への旅費支援

寄稿 1ページのたより

3月11日の地震が起きた後、「まるで映画の中にいるみたいだ」と思ったのは私だけではないでしょう。

私と中2の長男、小6の次男が、福島県郡山市から北海道東川町に避難したのは2011年5月下旬。それは奇跡のような偶然の重なりでした。

私たちが避難して1週間後には小学校の運動会。郡山ではいつも徒競走で下位だった次男が、突如1着になったのにも驚いたけど、土煙をもうもうと立てて引っ張り合う綱引きや、お昼には太陽の下、家族それぞれに校庭の芝生の上にシートを敷いて、手作りのお弁当を広げて食べるというその光景ったら！もちろん我が家もちゃんと重箱弁当を用意して3人で食べたわけですが、「同じ日本で本当にこんな生活しているんだよね？」と、驚きなのか安心なのか感激なのか悲しみなのか―なぜか自然と涙があふれました。（その涙は中学の体育祭まで、数年間続きました。）

我が家は2011年12月に一度帰還しています。次男の小学校の卒業式は、郡山で迎える約束で避難したからです。しかしその当時の学校の混乱ぶりは凄かった。屋外行事が全て無くなり、卒業アルバムに載せる写真が足りないということで、卒業

一泊旅行を学校が企画したものの、県の補助金が上限に達してしまい、急遽別の補助金に乗り換え、PTA主催に切り替えて決行。保護者の随行が必要で、私が名乗り出て付き添ったおかげで、担任と深夜までおしゃべりできました。実は担任の先生も、春休み中は自分のお子さんを祖父母のところに避難させていたというではありませんか。その祖父母宅の場所とは、なんと旭川市！

他には、「放射能に負けない子どもになろう」とプリントが来たり、「避難・保養」という文字がイベントタイトルに入っていると公共施設を借りることができなかったり、なんてこともありました。

そんな福島県内の混乱状況に耐えられず、2012年4月、東川町に再避難できたのも、これまた奇跡的。なにせ当時、町内にアパートの空き物件は1件しかなかったのですから。

その後も、まるで映画かドラマのような、奇跡や偶然のオンパレードだったように思います。

一方で、つい最近まで、ずっと心の奥底に、「もし避難していなかったら、子どもたちはどういう人生を送っていたのだろう、やっぱり避難しない方が良かったのでは」という後悔があったのも事実です。

2019年には私が町議会議員になったこともあり、めっちゃ前向きな人だと思われているかもしれませんが、辛いことに突き当たるたび、夜布団の中で「なぜここでこんな生活をしているのだろう。このまま朝になったら体が溶けて無くなっていたらいいのに」と、何度も涙しました。

こんな避難経験を、記録に残さなくちゃと思っていたところ、小林憲明さんの『ダキシメルオモイ』の絵と、安孫子亘監督のドキュメンタリー映画『決断』に、我が家が存在した証を残していただきました。まるで映画のよう…と思っていたのが、まさか本当に映画になってしまうとは。今度こそ文字に記すぞ！と、小声で宣言しておきま～す。

（鈴木哉美）

辛いの漢字に一本足せば幸せに！頑張りましょうね！

東日本大震災の影響により
道内に暮らしている方の

相談窓口

メールや FAX、
お手紙でも
ご相談ください

TEL 011・200・0973

NPO 法人 北海道 NPOサポートセンター

平 日 10：00~17：00

FAX 011・200・0974

info@hnposc.net

〒064-0808
札幌市中央区南 8 条西2丁目 5-74
市民活動プラザ星園 201

地下鉄東豊線「豊水すすきの駅」
6 番出口から徒歩約 7 分
地下鉄南北線「中島公園駅」
1 番出口から徒歩約 5 分

岩手県、宮城県、福島県が設置する
相談窓口はこちら。

岩手県
いわて被災者支援センター
電　話 019-601-7640（平日 9:00~17:00）
メール info@sumaiansin.net

宮城県
宮城県復興支援・伝承課
電　話 022-211-2424（平日 8:30~17:00）
メール denshoh@pref.miyagi.lg.jp

福島県
ふくしまの今とつながる相談室 toiro
電　話 024-573-2731（月・水・金 10:00~17:00）
※祝祭日の場合は休み
メール toiro@f-renpuku.org

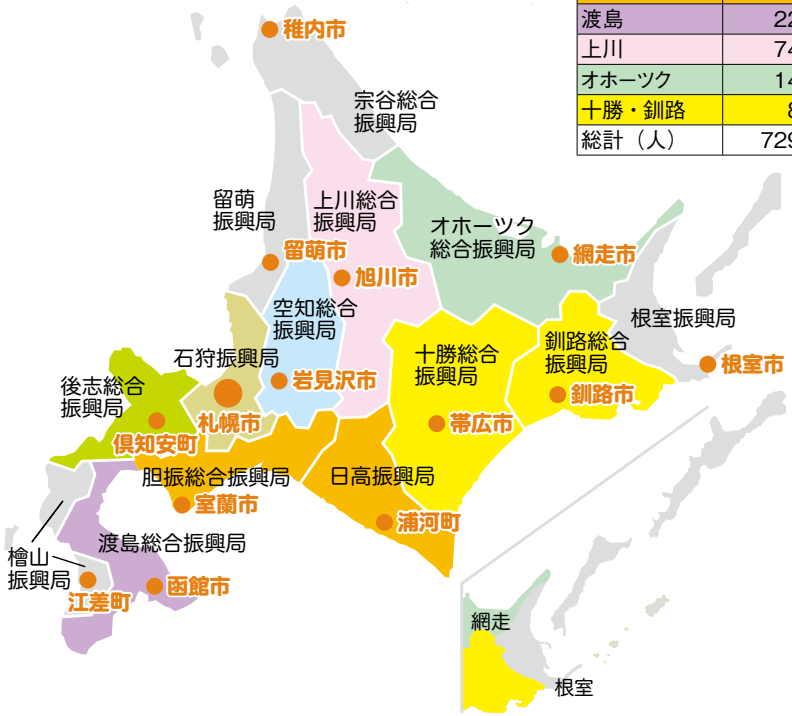
北海道における被災避難者の受入状況

下記の避難者数は、復興庁が公表している「避難元へ帰還の意思を確認できた方」の数です。なお、北海道庁では、さらに幅広く「ふるさとネット」（右記参照）に登録しているみなさまに、お知らせ（本紙）をお届けしています。
〈からから便り郵送世帯数（避難元別）：岩手県16、宮城県61、福島県171、その他32
※2025年10月末現在

2025年８月１日現在

空知	28
石狩	504
後志	31
胆振・日高	48
渡島	22
上川	74
オホーツク	14
十勝・釧路	8
総計（人）	729

市町村別の受入状況は、北海道のホームページからご覧いただけます。▶



全国避難者情報システム「ふるさとネット」の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

■連絡先
① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
②北海道総合政策部地域創生局地域政策課
　電　話：**011-206-6404**
　メール：**shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp**
③避難先市町村の担当窓口
（市町村により部署が異なります）

編集後記

私の住む地域にはヒグマ警報が出ており、朝晩の犬の散歩にクマ鈴を持つようになりました。春の雪解け時期には、住宅地に接した山の斜面に、今まで見たことがないほどの鹿の大群がいて驚きましたが、今度はクマ。そういえば、去年はよく見かけたキタキツネ、今年はあまり姿を見かけないなぁ、と思う今日この頃。もうすぐ雪の季節。みなさま、冬支度はもうおわりましたか？　（金榮）

道内避難者心のケア事業
ウェブサイト：https://hnposc.net/311_hokkaido

からから便り Vol.3 ■ 2025 年 11 月 20 日発行
発行：NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター
〒064-0808 札幌市中央区南 8 条西2丁目 5-74 市民活動プラザ星園 201
電　話：011-200-0973　FAX：011-200-0974　メール：info@hnposc.net
委託元：北海道

お預かりした個人情報は、 避難者の生活支援のために利用するほか、 出身県への提供など限定した目的にのみ利用し、 その他目的には一切利用いたしません。

【無断転載・コピー】
本紙掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転載することを禁じます。